

Title	「怒れる若者たち」
Author(s)	竹森, 修
Citation	英文学評論 (1962), 12: 96-107
Issue Date	1962-09
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_12_96
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

「怒れる若者たち」

竹 森 修

「進歩せる文明とは困難な諸々の問題というに等しい。だから進歩が大なれば大なるほど、当然危険も大なのである。生活はますます快適になる……が一方ではますます複雑になる」とはスペインの哲学者オルテガの言葉であるが、文明の内包するかかる矛盾が社会生活の殆ど全面にわたって露骨に表面化しつつあるのが現状である。実際今日ほどわれわれを保護し、欲求を満足させてくれる時代はかつてなかった一方で今日ほどわれわれを危険に曝け出し、不安に突き落している時代もない。こういう矛盾はいくら環境をどうかしようとしたところで解消できるものではない。というのは現にわれわれは生活がますます便利に快適になることを求めているのだが、その便利さ快適さがいよいよ危険を大きくし、より大きな不安へとわれわれを引込んでいるのである。これはわれわれ自身のどこかが狂っているとみなければ、どうしてもおさまりがつかない。欲求の充足がそのまま自己破壊になっているのである。欲求の充足とは自我が自我を喰うことである。しかも欲求はいつまでたっても完全には充足されることがないから、自我が自我を喰う生活もまた激化し深刻になってゆく。欲求が充足されるということはさらによりおおくを欲求すること、さらによりおおくの自我を喰おうと欲求することを意味するとすれば、文明の快適な充足的な進歩がどういふ結果をもたらすか、分り切ったことである。文明の進歩は人間のか

かる内的矛盾を拡大し、いよいよ露骨に表面化するばかりである。文明が進歩すればノイローゼ患者が増えるということは、偶然であるどころか事の真実を示している。ノイローゼ患者はこの内的矛盾の無知ではあるが正直な体現者である。彼はわれわれだれもが繰り返している自我が自我を喰う生活にとことん追いつめられて、それがあたまにきた人間のことであり、自我に喰い殺された自我である。ノイローゼ患者の激増だけではない、社会道徳の頹廢、犯罪殊に低年齢層の犯罪の激増、自殺者の激増もまた事の真実を明証している。年々増える交通事故もまた決して単なる物理的衝突を意味するものではない。かかる社会的状況は、本質的にみると、近代社会を支配してきた物質本位の価値体系の破局を意味すると同時に、かかる一個の価値体系を形成するまでに至った、人間に本然的なある種の心的態度の破局を意味するのである。不道德漢、犯罪者、精神病者、自殺志望者は機械文明の社会に対する無自覚の「アウトサイダー」であり、さらにいえば自分自身に対する無自覚の「アウトサイダー」である。彼らは今日われわれだれもが置かれている分裂症的精神的境界の代表者たちであるが、しかし彼らの路上占拠は然るべき治療師の行方不明の結果なのである。

個人をいやおうなしにひとつの社会的単位として扱う産業化された民主主義社会とその上に解き放たれた精神的混沌、原水爆戦争の可能性、これらは今日の外部社会の空間性と時間性を決定していて、個人の内部に自己の無力感、無価値感、敗北感、虚無感を惹起し不動のものにしているかにみえる。今日の社会はあたかも押し破ろうとすればするだけ無限にその厚みを拵げてゆく鉄壁の牢獄であるかにみえる。まるで近代科学に征服された地水火風の自然力が姿を変えて復讐にまかり出たかのように、社会が「破壊的要素」(スベンダー)そのものとなって個人の四圍を取り囲んでいるかにみえる。社会は個人の意志の反映を少しも許容せず、個人を「自動人形」

(ハーデイ)のように扱うところの、それ自身の法則によって展開する仮借なき外部力であり、個人は暴走するその行く手を、しかもすべての人間の運命をそのなかに捲き込んで暴走するその行く手を、ただ呆然と絶望的に眺めているしか手がないかにも見える。スイリトオ (Allan Sillitoe) の小説『Saturday Night and Sunday Morning』の主人公、アーサー・スイートンの、「金を貯めるなんて阿呆のすることさ。だって金の価値は下落する一方だし、それにとにかく、アメ公の奴、モスクワに水爆を落すなんていう気違い沙汰をいつなんどきやらかすか分つたもんじゃないからな」、という台詞は、水爆を落すのがどこの国かは知らないが、今日のわれわれの生活を絶えず蔽っている底なしの不安の境位を、最も卑俗的にはあるが、最も端的に物語っている。このように、機械文明の社会の複雑な現実が単に空間的なたちに留まらず、時間的なたちまでとってわれわれを脅かしているのであるから、問題は切実である。事実、原水爆を巨視的な象徴とする文明社会の複雑さが惹起す不安は、つきつめれば人間存在そのものに係わる不安、死への恐怖を意味するのであって、われわれは改めて人間存在の問題に、さらにいえば、自己の問題に、たとえ外部的動機からにせよ、広く社会的連帯性をもって直面しているのである。しかもわれわれの問題意識が社会的連帯性を帯びているという事実になかったひとつの可能性が認められるのである。

宗教から最も縁遠くなったはずのわれわれ、また縁遠くなったことを「人間性」の勝利として誇ってきた今日のわれわれが、お釈迦様の掌の上の孫悟空同然に、実は宗教を最も身近かに引寄せているとは皮肉なことである。

ところでここにひとつ問題がある。深瀬基寛先生は『批評の建設のために』の中で、「宗教的感覚にとつては天国よりも地獄が大切です。地獄にいながら地獄にすることを知らないということがパスカルのいう人間のミゼ

ール、悲惨であります。現代人がいかに悲惨であるかは、馬鹿でないかぎり各人それぞれの『苦悩の能力』（マリ）によって知っていますはずであります」と述べておられるが、われわれは人間であって馬や鹿でないのだから、だれもが「苦悩の能力」をもっているはずだし、現にだれでも苦悩する。しかし、わが身の地獄をたえだれもが無自覚的に知っているにせよ、自覚的に知っている人びとがいかに少いことであろうか。「生命を裏切る現実」（スペンダー）の社会のミゼールは、その社会の秩序が、かかる社会的現実を自覚的に捉えぬわれわれ時には社会の前途に漠然とした不安を感じながらも、その社会の便利な面、快適な面にいつしか眼を奪われるわれわれによって形成されているという事実にある。そしてその事実こそ「生命を裏切る現実」であるのだ。「地獄にしながら地獄にいることを知らない」ということ、そのこととりもおさず「地獄」なのである。こうした人びとがいだく文明社会の危機の意識はいつも外部から来るところの即物的なものであるゆえに、それをもたらした外部的動機が消滅すると当の危機感も解消して、物質本位の既成の社会秩序の自己満足的「インサイダー」にかえるか、あるいはまた文明社会の危機を政治的・経済的なものとして受けとり、自己不満足的「インサイダー」として物質本位の立場から同じ物質本位の既成秩序に反抗するかのいずれかである。エモーションナルな左翼主義者、アーサー・スイートンも、「アメ公の奴」が「モスクワに水爆を落すなんていう気違い沙汰」をやらかしっこないと分ったら、そして「金の価値」が下落するようなことがなかったら、せつせと金を貯め出すかも分らないのであり、第一、その根性において右も左も変りがないのである。

ところで「地獄にいなから地獄にいることを知らない」人びとが形成する「生命を裏切る現実」の社会の秩序は「生命を裏切る」秩序である、とまるまる言い切ってしまうのは危険であるが、それにも拘らずある意味ではそう言えるのである。つまり、功利的な価値体系が中心に居坐った現代社会においては、「秩序」の観念そのも

のに混乱が生じ、かつて無秩序を意味したものが今日秩序顔をして現われ、かつて秩序を意味したものが今日では無秩序を装って現われているかも知れないのである。スペンダーは『創造的要素』(The Creative Element)の中で、「精神的に不毛なるひとつの世界においては、伝統的な制度的宗教が謬りなき道徳と見なし、正しい美的立場と目するものまさにその逆が、精神的に意味を孕む唯一の立場とならないとは限らないのである」と述べているが、あとに触れるような問題を保留した上でわたくしはそれに同感するものであり、またそのような角度から「怒れる若者たち」を見てゆくべき要素が彼らのなかに些少なりとも在ると考えなければならぬ。

さて、わたくしは英国における「怒れる若者たち」というひとつの社会的現象が広く機械文明の社会の精神的境位の破局をなんらかのかたちで体现していると考えるのであるが、彼らの場合はさらに「既成の秩序社会」(the Establishment)という彼ら特有の問題が折り重なって、事態は複雑な様相を呈している、というよりも事態を不必要に複雑にしているが、しかしわれわれはそれに引込まれて問題の本質を見失うようなことがあってはならない。あるいはそれにはたいする彼らの反応の仕方に問題の本質が副次的に示されているともいえる。

ウィルソン (Colin Wilson) は *Religion and the Rebel* の中で、みずからの不条理性にたいしてあき旨を決めこんで現状の秩序維持に汲々としているブルジョア世界、「眼で見、手で触れるものをすべて実在として受け入れる、居心地よい離れ島のブルジョア世界」を攻撃しているが、「怒れる若者たち」という呼称で十把一括げにされている作家たちもこの「既成の秩序社会」に対してなんらかのかたちで批判的態度をとっている点ではこの十把一括げもあながち不当とはいえないが、しかしわれわれは先ず彼らそれぞれの基本的態度の相違を確かめなければならぬ。

先ず、レッシング (Doris Lessing)、『マンダマスン (Lindsay Anderson)』、雑誌『ニュー・レフター・リヴュ

』(New Left Review)の連中のように、左翼イデオロギーに立って「既成の秩序社会」を批判するグループがいる。彼らにとつて「既成の秩序社会」の内包する不条理性とは政治的・経済的不条理性であり、彼らの攻撃する「眼で見、手で触れるものをすべて実在として受け入れるブルジョア世界」とは、既得の特権にどっかと腰を下し、みずからを中心として築きあげられた階層秩序を不動の実在として自己満足的に受け入れているいわゆるブルジョア世界のことである。彼らは若いだけに理想主義的であり、その動機は比較的純粹であり、「ブルジョア根性」という用語にこめられている有産階級の精神的諸要素を何よりも問題にする。彼らにとつて「地獄」とは外部社会の地獄であり、また政治的・経済的に解決されるべき地獄である。しかしながら、端的にいつて、彼らが攻撃する有産階級のブルジョア根性が自己満足的ブルジョア根性であるとすれば、彼らが弁護する心的態度は自己不満足ブルジョア根性であつて、その姿勢の方向においてなら変りなく、実現されるべき理想社会は同じ自己満足的ブルジョア世界に他ならず、かかる物質本位の心的態度こそとりもなおさず社会の精神的危機を醸成しているということに無知であるという点で両者ともなら異なるところがないのである。しかも英国においては、「福祉国家」政策によつて現に国民全体の物質的生活は著しく向上し、その点からすれば、国民は総中産階級化されつつあり、ブルジョア資本主義から「大衆資本主義」へと移向しつつあるわけであつて、彼らは保守党政権による福祉国家政策の中途半端さを攻撃したり、またその対外政策を攻撃したりすることによつてわずかに自己の存在を主張しているにすぎず、その叫びもなにかしら空虚な響きを含んでいて、氣勢があがらぬようである。また「一九四〇年から四二年までくちばしの黄色いマルクス主義者であつた」というエイミス(Kingsley Amis)も「まや政治的行動について懐疑的になり、ハイन्द(Thomas Hinde)は社会主義者の連中もトリーイ黨員たちもひとつ穴のむじなとみて政治を全く忌避している」という。こうした中であつて特に興味深いのは

Look Back In Anger の主人公、ジミー・ポーターを描いたオズボーン (John Osborne) である。ジミー・ポーターはオズボーン自身の代弁者と考えてよいとおもうのであるが、この主人公は、国内の政治問題が殆どすべて三〇年代四〇年代で解決してしまい、いまや身体ごとぶつかってゆくべき「大目的」Good Cause が見付からず、やり場のない若い情熱に鬱々としたのしませず、親御の立腹にも委細かまわず連れ出して同棲した陸軍大佐の娘の「ブルジョア根性」にけちをつけ、妻の家出中に妻の女友だちとい仲になるところの、「フランス革命の時代に生れたらよかった」男なのである。しかしこんなケチくさい男であるにも拘らず、ここにはいくつかの注目すべき問題が含まれている。ひとつには「既成社会」の道徳的秩序の偽善性にたいする不道徳的反抗であり、第二は、「英雄色を好む」と諺にあるように、革命に向けられる情熱と女に向けられる情熱との同質性の問題であり、第三に、外向きの関心はすべてディヴェルティスマン（あることからの気晴らし）にすぎないということである。これらの問題についてはあとで触れることにして、とにかくわたくしは、このジミー・ポーター青年が政治的・経済的諸問題がたとえすべて解決されてもなおそのあとに残るであろう現代社会の精神的境位の破局、人間存在の生きながらの死をみずからのうちに暗示している事実注目したのである。

このような観点からするとき、「怒れる若者たち」の主流はなんとしてもウィルソンとホルロイド (Stuart Holroyd) に帰せられねばならない。というのは「危機の本質」を人間の内面的不条理性に認めたのはまさしく彼らであったからである。その不条理性とは人間の心的態度の客体化への傾向である。

小論のはじめに一寸触れたように、生活が便利に快適になってゆくにつれてわれわれの心的態度はいよいよ外向きになってゆく。眼で見、手で触れる世界をわれわれの实在世界としてますます自己満足的に受け入れるようになってゆく。これをわれわれの心的態度の客体化、あるいは後に述べるように人間存在の時間性を無視し空間

性だけの人間存在の妄想を培うという意味で、心的態度の空間性化と名付けると、近代の社会的諸条件は殆どすべてこの心的態度の客体化、空間性化を助長する方向にはたらいてきた事実をわれわれは先ず認めなければならぬ。殊に近代科学はその実地応用を通じて人間の生活環境に最もおおきな直接的影響を及ぼし、それを通してわれわれの心的態度を決定的な客体化、空間性化へと導いたといえる。物質生活の向上はそれはそれで結構なことであるが、しかしながら、同時にそれは生死する主体的自己の問題からいよいよわれわれの眼を背けさせる危険をも含むのであって、今日の社会の「精神的混沌」は本質的にはこの心的態度の客体化、空間化に帰因するのである。

ホルロイドやウィルソンのいう「ブルジョア根性」とはかかる客体化された心的態度を意味するのであるが、今日国民全体が総中産階級化されつつある英国においては、ホルロイドが懸念しているように、かつてはブルジョア階級を特徴づけた享乐的な客体化された心的態度がいまや社会階級性を脱して「空前の勢で拡まり」、ウィルソンの先ほどの言葉ではないが、「眼で見、手で触れるものをすべて実在として受け入れる、居心地よい離れ島のブルジョア世界」が実現しつつあるわけである。従ってわれわれは「ブルジョア根性」の概念をホルロイドやウィルソンが使っているような意味に定義しなおすべきだとおもう。

しかしながら、こうしたブルジョア根性の世界はいかにも居心地よさそうでありながら実はあまり居心地よくないのである。その快適な生活の背後を一眼「理由なき」不安が蔽っている事実を見おとしはならない。ウィルソンの引用によると、たとえば富裕社会として名が通っているスエーデン、デンマークにおける一九五六年の自殺者の割合は、スエーデンでは人口の四四六〇人毎に対し一人の割合、デンマークでは四四三一人毎に対し一人の割合で、これは英国の場合の二倍以上になるといふことで、殊に世界で最高度に組織された福祉国家である

デンマークの場合、この自殺者の高率の原因を到底社会の経済的不安定に帰することはできない、とウィルスンはつけ加えているが、ここに示されている一見理由のない不安は金と閑暇の快適な生活に伴う生の倦怠が最も出ず、人間存在そのものに係わる本然的な不安と考えてよいとおもう。しかもこの不安が社会的には社会道徳を乱し、直接間接に犯罪の増加をもたらしているわけである。生の倦怠とは生きることの意味を見失ったということであり、ウィルスンの小説、*Ritual in the Dark* の主人公ソームが言うように、「生活することは快適ですが、それは生がひとつの意味をもっていると信ずることは全く別のこと」なのである。

わたくしは先ほど、現代社会の精神的混沌はわれわれの外向きの、空間性化された心的態度に帰因すると言ったが、この外向きの心的態度をひっくり返してみると、それは客体的なものによって心の「常住」を得ようというところである。ところでこの態度においては人間存在の時間性的問題が意識の底において無視されているのであって、そこには死への恐怖があるわけである。だからかかる心的態度がさらに空間性化してゆくということは死への恐怖が内攻していつていることを意味する。別にいえば、今日の社会の精神的混沌は自己の生死という主体的な問題に自覚的に対決することを避けているわれわれの心的態度に帰因するのであり、この態度が社会に混乱をもたらし、その混沌がわれわれを不安にし、その不安がさらにわれわれを客体的なものへ依りかからせる、つまり心的態度をさらに空間性化する、そしてその態度がさらに社会の混乱を深める、という風に皮肉な堂々めぐりをくり返しているのである。従って問題の解決は宗教的態度の回復を措いて他にない。つまり生死の意味を自覚するということは単純に死を恐れないということでは決してなく、われわれが死への恐怖を克服しこの空間性化された心的態度を棄てる努力をすることによってはじめて生は充実した意義あるものとなってゆき、こうして社会はその精神的混沌から脱することができるのである。

先ほどわたくしはウィルソンの「眼で見、手で触れるものをすべて実在として受け入れる……ブルジョア世界」という言葉を引用したが、この言葉には実は深い意味がかくされているとおもわれる。勿論ウィルソンはそれをもって単に有産階級を指弾したのでもなければ、また外部社会の物質本位の精神的現実を指摘するに留まったのでも決してなく、同時に彼はブルジョア根性を内面的なひとつの永遠の人間的条件として捉えていることを意味する。というのはいつの時代でも、まただれでもが「眼で見、手で触れるものをすべて実在として受け入れる」心的傾向を本然的にもっているからである。ここにひとつの問題が起ってくる。そしてそれは「地獄にいないがら地獄にいないことを知らない」自己満足のインサイダーや、地獄を物質的地獄と了解しているためにこれまた「地獄」の何たるかを知っていない自己不満足インサイダーの問題に劣らず重大な問題なのである。それはわが身の地獄を知っており、またそれが精神の地獄だということを知らずとも、それをわが身が置かれて、いる外なる地獄とのみ心得て、地獄とは俺自身のことだと考えない人びとがいかにおおいことかということである。つまりその人びとにとっては地獄とは外なる地獄であり、外部社会が地獄なのである。今日、社会の精神的危機を叫び、その精神的不毛を歎く声はしばしば聞かれる。しかしそれらの人びとのおおくが、社会を個人に対して立つ（ということ）は現実には自分自身に対して立つ、ということにもなるわけであるが、ひとつの外部的世界として単純に片付けてしまいがちであるのどうしたことであろうか。わたくしは個人対社会という対立の形式を当然のこととして受け入れ、それに基づいて（個人に対する）社会を問題にし（社会に対する）個人を問題にする心的態度こそ問題であるとおもう。勿論「生命を裏切る」外部社会の現実の認識は絶対に必要であり、われわれは物質本位の外部社会に対してアウトサイダーとして立たなければならない。しかしながらこの外部的現実を決して単なる外部的現実ではない。それは心的態度の客体化への傾向という人間の不変の内面的条件がつくり出したもので

あり、従つてこの外部的現実と同時にわれわれ自身の内部的現実なのであり、その客体的な投影なのである。従つて外部社会に対してアウトサイダァとして立つことはとりもなおさずかかる心的態度の自分自身に対してアウトサイダァとして立つこととだけなければならない。つまり社会と個人の関係は決して単純な対立の関係ではなく、社会は社会であり個人は個人であると同時に社会は個人であり個人が社会であるというように相対立する関係でありながら同時に同一性の関係でもあるのである。従つて社会の精神的「変容」とはとりもなおさず個人の内面的「変容」でなければならぬ。現代においては「生命を裏切る」外部的現実が圧倒的であるために外部社会対個人という形式が絶対的であるかに見える。しかしそこに「外向き」の眼の致命的な陥穽がある。つまりわれわれは外部社会を絶対化することによって同時に個人そのものを絶対化してはいないだろうか。外部社会対個人という図式にみられるまさにこの個人の観念こそ追求されなければならない。というのは現代は「人格」の観念が野放しにされ保証されている時代だからである。「人格」の観念が外部社会との関係においてでなければ考えられなくなっているということ、それが逆に人格をひとつの「社会的単位」化へと導き、人格の人格性を剝奪する皮肉な結果をもたらしているともいえる。近世は自我の確立の歴史だとよく言われるが、「人格」の観念を口喧しく言い出したとき逆に人間は「人格喪失」の運命をみずから切り拓いたのかも知れないし、「人格」の観念がなかったといわれる宗教的時代に逆に「人格」が今日のそれと異った次元において成立していたのかも知れないのである。ウィルソンはこのような観点から、東洋文明は「人格」の妄想から遁れようと努めてきたのたいし、西欧文明は「人格」の妄想を培養してきたと述べているが、先ほどのウィルソンの引用、「眼で見、手で触れるものをすべて実在として受け入れるところの居心地よい離れ島のブルジョア世界」の真意もそこにあるのである。つまり、元々、われわれが見、手で触れるものをわれわれ人間の実在の世界として受け入れた

とき、外部社会が成立し同時にそれに対立する自我もまた実在として成立しているのであるから、個人の「人格」の観念は決して抽象的に存在する観念ではなくて、いかなる時代でも人間に生得の心的態度なのであり、いつの時代でも批判されるべきものであったのであるが、近代においては逆にその心的態度が公認され補強されてきたところに社会の精神的境位の破局という事態が生れてきたのである。ところでこのように「外向き」の五感で捉える世界を自己の实在世界として受け入れるのがすべての人間の常であるがゆえに、「アウトサイダー」「インサイダー」の問題は決して外部的な問題であるに留まらず、それは直ちに内面化されてゆくべきものなのである。ウィルソン自身述べているように、「アウトサイダー」は宗教へ入るためのひとつの過程的段階であり、その客体的現実認識が内面化されて、自分自身に対する自覚的アウトサイダーになったとき、われわれは宗教者として立っているわけである。

(未完)